



インガラボ

NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0811
岡山県岡山市北区番町2丁目6番7号
TEL:086-224-0102
URL:http://www.mjcp.or.jp

**ピーゼンビロの花が咲き乱れる仏塔国
ミャンマーへ、そして?**

長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科 組織細胞生物学分野 教授
(長崎大学副学長(国際担当)、長崎大学留学生センター長)

協会理事 **小路 武彦**



▲左が著者、右はDMR局長

ミャンマーへ詣で始めてはや20年、その最初は1987年の12月から1988年の1月にかけての二ヶ月の滞在であった。当時は東海大医学部の助手で、濱島義博団長(当時京都大医学部教授)の指揮下ラングーン(現ヤンゴン)の医学研究局(DMR)でJICA派遣専門家として肝炎ウイルス遺伝子の同定法を担当した。当法人理事長の岡田茂先生とご一緒したのもこれが始まりである。当時はビルマであり鎖国制社会主義の真つ直中、まさに国連最貧国の状況で極貧と強烈に黄金に輝くシユエダゴンパゴダが印象的で、仏教に支えられ何故か笑顔が絶えない親日国であった。ブーゲンビリアの花の鮮やかな色彩を今も忘れられない。一方で、貧しい服装の人々が乏しい照明の中でうごめいている。この国に於ける基礎医学研究とは何か、違和感を感じながらウイルス学部門で朝

からトイバームジュース(スカイビール)という天然酒を煽っていた。時間が余りに緩やかに流れるのに驚いていた。焦ってもどうしようもない、また焦る必要もない、人生最初の経験であった。北部のタウンジーを訪問しレイレイ湖やピンタヤ洞窟を訪れる中で現地人化した元日本兵に会い歴史の現実と直面した。この最初の訪問では本当の下痢症を経験し一本10ドルの純水とポカリスエットの粉の威力で生きながらえた気がする。帰国後も Dengue 熱様疾患を患い結局 10 kg 程度無理なく痩せた。

2 回目は1990年12月から1991年1月にかけて上記と同様に一ヶ月滞在した。突然の新紙幣の導入(旧紙幣の無効化)を引き金に起こった大きな社会的混乱を他所に、大学が閉鎖された以外は結局社会的にも学問的にもそれ程変化はなく、ただ JICA

から持ち込まれた高価な先端機器が有効に使われることもなくどんどん老朽化していくのを見るに忍びなかった。この二度目の訪問では、長崎大医学部講師として参加し insitu hybridization の実習を DMR で開催したところ、意外に多数の医師・医学研究者が集まり、社会的困難さとは関係ないミャンマー国民の知的向上心に大いに驚いた次第である。この訪問の際に古都マンダレーとパガンを訪れ、蒙古軍に破壊されたパゴダの巨大遺跡群に接し、かつてのこの国の繁栄に思いを馳せた次第である。この訪問後ミャンマーの社会情勢は格段に悪化し国際的孤立の中でミャンマー関係事業の多くは停止した。

1996年度岡田先生が「ミャンマー国肝癌発生要因としてのサラセミア症の鉄過剰症と輸血関連疾患の調査研究」で文科省科学研究費が特別研究を獲得され、その後特定領域研究として2000年度まで継続した。私もその頃米国より助教として帰国しており、班員として現理事の石川隆俊先生、小出典男先生、武田和久先生方々と活動を継続させて頂き、毎年12月にミャンマーを訪れDMRの病理学部門を中心として特に肝組織での鉄代謝関連遺伝子発現の検討を分子組織細胞化学的方法論の導入を試みた。この頃のミャンマーは、以前と比べ見違える程道路の整備は進み、街灯も明るくなり車も日本の中古車を中心とはいえ顕著な社会インフラの改善が認められた。ヤンゴン市内にあった多数の竹造りの高床式住居は撤去され、海外資本による近代的ホテルが林立するに至った。実際には通貨チャットの下落とガソリン等の高騰で住民生活は窮乏していると思われたが底抜けの明るさと笑顔は健在であった。意外で腹が立ったのは国際的に孤立していたかに見える時期、実は最もミャンマーの孤立化政策を押し進めた米国は連邦政府ではなく目立たない州政府レベルで莫大な資金をもってDMR等に参入し何と日本が

疎遠になっている間に研究協力関係を築き JICA が支援した建物や機器は米国向け研究の為に利用されたのである。2001年度からは私が「ミャンマー国に於ける環境毒性物質としての鉄による肝癌発症若年化に関する調査研究」で文科省科学研究費基盤研究(B)海外学術調査を獲得し、その後2度の更新を経て現在に至っている。この間も毎年岡田先生共々訪緬し医療・医学研究等にてこ入れに力を注いできた。特にここ7年間は毎回様々な組織細胞化学的方法論の実習コースを開催し毎回の参加者は30-40名を越え、のべ250名以上のミャンマー人医学研究者を育成してきた。確かに生活環境も他のアジア諸国とそれ程差がないように明らかに向上し、ビールも泡が出て苦みもある本当に旨い「マンダレー」(赤レベル、青レベル)や「ミャンマー」(緑レベル)となり、ピートナツも発癌剤アフラトキシンを気にしないで食べられるようになった。しかしながら薄切機器や顕微鏡などの基礎的機材は欠乏し先端機器の維持・補修は覚束なく相当の資金を導入しても砂漠に水の感がある。先端機器の老朽化を見て思うには、先ず機器よりも「人間の育成」自前の機材による独創的研究を可能とする教育が必要で、将来性のある有意義の医学研究者を日本で教育し、人的基盤の抜本的整備に貢献すべきではないかということである。この点では、本NPOは的を得た活動集団であり、会員の皆様の高邁さにひれ伏すばかりである。昨年は当NPOの御支援で Dr. Win Papa Naing の長崎大での白血球病分子診断研修も可能となった。

長崎大学でも2007年2月にミャンマー国保健省医学研究局及び医科学局との間で学術交流協定を締結し、ミャンマー国全ての医・歯・薬・看護系等大学との交流が公的となった。そうした中で昨年は学生実習中古(再調整後)の光学顕微鏡25台を病理診断用に寄贈した。また様々な費用を捻出して、これまで Drs. Minn Minn Myint Thu, Kyaw Soe, Moh Moh Htin, Aye Aye Than 等を長崎で短期研修を行わせ本年も数名の受け入れに努力している次第である。

心地の Nay Pyi Daw に突然遷都することが決まり、本当かと思っていたら大変な大都市計画のもと建設が進められていた。ヤンゴンからコンクリート製の道路が二直線に伸び、昨年12月に5時間のドライブで訪問した際には超豪華な国会議事堂が建設中であった。サイクロンルギスを被災し、想像を絶する破壊を被つても首都建設の情熱は不変のようであった。この国が世界のグローバル化の中でどのような位置付けを狙っているのかは勿論不明であるが、120を越える少数民族を抱え、また大多数の貧困者を抱え困難な状況の中にあることは間違いない。しかしながら、この極めて親日的で純朴で人間性豊かな愛せる人々が未来を描けるよう微力ながら人造りの点で貢献したいと考えている。今後とも何卒宜しく変わらぬ御支援の程お願い申し上げます。



数年前にミャンマー国中

ミャンマー 医学会総会出席

岡山大学大学院
医歯薬学総合研究科 総合内科教授
協会副理事長 小出 典男

2009年1月12から16日にかけてミャンマー医学会総会に出席してまいりました。岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 腎・免疫・内分泌代謝内科教授榎野博史先生、同血液・腫瘍・呼吸器内科教授谷本光音先生、同形成再建外科教授木股敬裕先生、同産科・婦人科学講師 本郷淳司先生、倉敷成人病センター肝臓病センター長久保木真先生らと供に総勢6人で参りました。榎野教授からは最新の慢性腎臓病と糖尿病性腎症について、谷本教授からは白血病治療に対する最新治療としての幹細胞移植療法について、木股教授からは形成再建外科学の最近の進歩について、本郷先生はご自身の精力的な貢献によってミャンマーでも開始された子宮癌検診およびその治療法の進歩について、久保木先生はC型肝炎の最新治療について講演

をしていただきました。別行動でミャンマー滞在中だった理事長の岡田先生も講演を聞きにきていただきました。特に木股先生の講演は非常にインパクトが強くミャンマーでの今後の医療活動を要請させることとなりました。医療事情が遅れているミャンマーの医師たちにとっては最新のわが国をはじめとする先進国での治療法進歩に関する講演は大変大きなインパクトを与えたようです。多くの若いミャンマーの医師たちが私たちのNPOを通じて日本で医療を学びたいという意欲を掻き立てたことと思います。短い滞在期間でしたが講演の合間にDMRや市内観光も先生方には楽しんでいただきました。

同の旅とお聞きし彼国の歴史も文化も知らないままに総勢16名の方々と胸弾ませた出発した。

ヤンゴン中央駅南側の目抜き通りに面した「トレーダス・ホテル・ヤンゴン」に宿泊。日本人墓地はホテルから北へ約20キロ、緑に囲まれブルーゲンピリアの色鮮やかな花が咲く静寂で広々とした美しい公園墓地であった。ターモイ、チャンドウの2箇所在ったのを平成10年にまとめて開園し、平和記念塔は昭和50年に出来たものをこの地に移したという。岡山県の慰霊塔はその中でも目立つ所に位置していた。煉瓦色の仏衣をまとった僧侶達の読経、在ミャンマー連邦日本国大使館の野川特命全権大使の挨拶、小田敦巳様の追悼文、遺族代表の追悼と続いた。戦友一人一人の名前を呼び語りかけられる小田敦巳様の言葉に涙があふれて止らなかつた。空は青く風は止り鳥が鳴き、

明る日差しが降り注いで、まるで寂光土にいるような時間であった。最後に参加者全員で焼香献花をして記念の写真に納まった。500人もの岡山県の若い命がこの地に散った事実を想いを深くした。(次回へつづく)

「研修を終えて」 ネイ・リン

私は細菌学の医師をしており、最新の分子技術を学ぶためにミャンマーから岡山大学医学部の細菌学教室にやってきました。

日本までの旅は丁度ミャンマーから帰国される岡田教授と一緒だったので何の困難も感じませんでした。しかし日本に着いて関西空港が人工の島の上に建設されたものであると知った時は本当にびっくりしました。それは全く自然の島のように日本人の活動力を素直に驚嘆しました。また新幹線(弾丸列車)の速さにも驚きました。しばらくして岡山やその周辺には、岡山城、後楽園、瀬戸大橋、備前焼、広島平和公園、呉海事博物館のような素晴らしい場所や物があることを知りました。どれも歴史的、地域

的な特徴と性格をもっています。日本のこれらの素晴らしい場所や物に大変満足しています。

日本人に関して言えば私は3つの事を確信をいたしました。日本人は他の人々の意見や希望を常に尊重します。日本人は勤勉で心底仕事に打ち込んでいます。そして日本人は間違いなく親切で思いやりがあります。その様なわけで私は日本人と知り合えたことを非常に誇りにしています。また日本人はミャンマーばかりではなく世界中に多くの寄付をしています。

岡山大学細菌学教室では基礎的なことから先端的な技術までを学びました。エライザ法(免疫学研究で用いる方法の一つ)SDS-IP AGE(電気泳動法の一つ)ウェスタンブロット(たんぱく質を同定する方法の一つ)ネステッドPCR(特別の遺伝子を増幅する方法)ピロリ菌の培養、前単球の組織培養、ウサギから抗体を得る方法などです。中部ミャンマーにある私の研究所は新設で発展の途上にありますので、これらの技術は私の研究所やミャンマーの人たちにとって間違いなく有用で応用可能なものです。

戦中を生きた私だがミャンマーは「ランゲーン」「インパール作戦」「ビルマの竖琴」位しか知らない遠い国であった。今回は岡山県ビルマ会とNPO日本・ミャンマー医療人育成支援協会との合

「私のミャンマー」 初訪問記 会員 品川 美和子

「研修を終えて」
サン・サン・トウエ

私は2009年1月14日にヤンゴンから岡山に到着しました。目的は研究研修です。この研修は岡田教授のご親切な取り計らいとNPOの援助によって可能となりました。

私には、西山さんとひとみさんの助けにより福山を訪ね、大槻先生と村上先生に連れられて京都にも行きました。京都府立医科大学、御所、金閣寺、八坂神社など

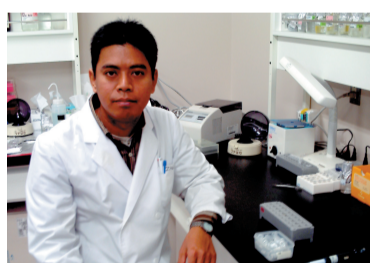
科 大学衛生学教室の大槻剛巳教授と助手の村上先生が指導してくださいました。期間は2009年1月16日から3月27日の間で、私は素晴らしい指導により大変多くの事柄を学ぶことができました。

毎週月曜日には定期的な会合があり実験の反省や今後の実践に有益な助言を下さいました。他にも川崎医大血液学教室の臨床カンファレンスや回診に定期的に出席し検査医学教室主催の骨髄カンファレンスにも出席させていただき臨床血液学についても勉強することができました。

大槻教授は私に言われました。「貴女は大変頑張っているの、私たちも貴女にできるだけの事を教えているのです」と。私は研修に大変満足しています。私は科学的な技術、医学的臨床的方法論など多くのことをミャンマーに持ち帰ることができそうです。これらはミャンマーの医学・臨床科学の進歩に大変役立つと思います。それから、岡山に滞在中には、西山さんとひとみさんの助けにより福山を訪ね、大槻先生と村上先生に連れられて京都にも行きました。京都府立医科大学、御所、金閣寺、八坂神社など



▲ミャンマー慰霊祭にて



▲研究室にて



▲研究室の仲間と(真ん中がサン)

※サンとネイリンは3月27日桜の花もほころび始めた頃に帰国しました。その後メールで満開の桜の写真を送り、大変喜ばれました。(西山)